

疫癘の章 蓮如上人の御文章(御文) 第四帖九通目

当時このごろ、ことのほかに疫癘とてひと死去す。これさらに疫癘によりてはじめて死するにはあらず。生まれはじめしよりして定まれる定業なり。さのみふかくおどろくまじきことなり。

しかれども、今の時分にあたりて死去するときは、さもありぬべきやうにみなひとおもへり。これまことに道理ぞかし。このゆゑに阿弥陀如来の仰せられけるようは、「末代の凡夫罪業のわれらたらんもの、罪はいかほどふかくとも、われを一心にたのまん衆生をば、かならずすくうべし」と仰せられたり。かかるときはいよいよ阿弥陀仏をふかくたのみまいらせて、極樂に往生すべしとおもひとりて、一向一心に弥陀をたふときことと疑うところ露ちりほどももつまじきことなり。

かくのごとくこのころえのうえには、ねてもさめても南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏と申すは、かやうにやすくたすけまします御ありがたさ御うれしさを申す御礼のこのころなり。これをすなわち仏恩報謝の念仏とは申すなり。あなかしこ、あなかしこ。

「延徳四年六月 日」(一七六二年)室町時代

延徳から明応へ改元して7年続く疫病禍が収まった。飢饉もあり死者多数との記事多く残っている